

第4章 諸外国の教師教育制度における体育教師教育プログラムの動向

第1節 イングランドの体育教師への導入教育（初任者研修）に関する研究

木原成一郎

I はじめに

チューバックら(Chubbuck et al., 2001, p.365)が指摘するように、教員養成を終えて教職に就いた初任者は、必ずしも教師としてスムーズに学校にとけ込めるわけではない。新任者の学校への導入に関する研究をレビューしたゴールド(Gold, 1996)は、「リアリティ・ショック」といわれる初任者の学校適応への困難が存在すると指摘している。同時に、ゴールド(Gold, 1996, p.559)は、離職した教師の研究（バーンアウト研究）のレビューを通じて、職能成長の要求を伴う初任者の心理的な必要に適合した学校改善の計画が初任者の消耗を軽減し満足いく結果をうむことができると指摘している。

米川秀樹ら（2003）によれば、イングランドでは、継続した職能成長(continual professional development)の一環として、1999年の教育雇用省通達により、養成から採用そして初任の1年間の成長を継続して援助する導入教育の制度(the statutory induction programme for newly qualified teachers)が定められ、2003年の秋にプログラムが改訂された。先のゴールド(Gold, 1996, p.559)の指摘をふまえれば、この導入教育の制度を初任教師にとって有効に働くものにするためには、初任教師が抱く職能成長の要求を伴う心理的な必要を明らかにすることが不可欠となる。そこで本研究は、イングランド中東部の地方都市で2004年3月に行った導入教育に関する調査により、初任者が導入教育の制度のもとで、職能成長と心理的な援助に関してどのような必要を持っているのかを把握することを目的とする。

II 研究の方法と資料の収集

1. 対象

本研究は、イングランド中東部の公立中等学校に2003年度に採用された新任の保健体育教師3名を対象とした事例研究である。事例研究の場合、研究の対象となる事例の抽出は、トーマス・ネルソン（1999, p.388）によれば、「研究の当事者がもっともよく調べることができる対象を選ぶ」のであり、「研究者が研究に含まれるべき基準を設けて、これに当てはまる標本を探し出す」とされている。本研究は、イングランドの導入教育制度が大学と学校と行政が連携をもつ教師の成長を励ますシステムとしてどのような特徴があるのかをまず明らかにすることが必要である。そこで、大学と学校と行政の連携に配慮した教員養成コースの運営により、イングランドの教員養成機関の評価として実施されるOFSTEDの査察制度により高い評価を得ているR大学の教員養成担当教官に依頼し、イングランドの導入教育制度の特徴を理解する研究目的を達成するために適切な事例として3名を選定した。対象者の3名のうち2名がR大学の教員養成コース、他の1名はLM大学の教員養成コースを2002年度に修了した。そしてこの3名は公立中等学校に2003年度に保健体育教師として採用された。

2. 資料の収集

トーマス・ネルソン (1999, pp.437-438) によれば、質的研究のひとつとみなされる事例研究においては、その妥当性や信頼性を保障するために、「研究者の結論を実証するために複数のデータ源を利用する」という意味の「トライアングレーション」という手段が取られる。本研究では、複数のデータ源を用いる「データトライアングレーション」の手段を用いた。つまり、第1にイングランドの導入教育制度に関する文献や事例の人物が勤務する学校便覧という文献資料を収集し、第2に事例の人物が行った実際の授業を観察してフィールドノートを作成した、第3に事例の人物に、半構造化面接法によるインタビューを行った。インタビューは、筆者とR大学博士課程コース大学院生の二人で、学校で授業を観察した後行った。ただし、BさんとのインタビューのみR大学の元指導教員が同席した。

ハーディー (Hardy, C. 1996)は、1993年度の中高等学校保健体育教員養成コース53名の教育実習生(postgraduate physical education trainees)に「教育実習で体育の授業に関する心配なこと」を自由に記述させて1510の心配事を収集し、それを4つの大項目に分類し項目ごとにメンターの行うべき援助と指導を提案した。本研究は、Hardy, C. (1996)の心配事項を尋ねることを通じて教育実習生のニーズを把握する研究方法を採用し、教育実習生にインタビューを試みた。インタビューは、インタビュアーから以下の3つの質問を示した後、インタビュイーに自由に語ってもらう形式ですすめた。1. 学校で何か心配なことはありませんか。2. 体育の授業や教科外活動(extra curricular physical activities)について何か心配なことはありませんか。3. 導入教育(the statutory induction programme for NQTs)について何か心配なことはありませんか。

3. 資料の分析

まず、文献資料を用いてイングランドの導入教育制度の概要と1年後に到達を期待される基準を明らかにした。さらに、2003年の導入教育改訂の中心であるthe career entry and development profileといわれるファイルに基づく初任者への援助過程を明らかにした。そして、学校便覧とインタビューのトランスクリプトをもとに、各事例の置かれた状況を次の6項目に区分して記述した。1. 赴任校の特徴。2. 教員養成の特徴。3. 赴任校の負担と導入教育の体制。4. 体育授業の実態。5. 部活動(Extra Curricular Activity)の指導実態。6. その他。最後に、木原成一郎(2004)によって提案された初任教師の「学校に関する心配項目」の次の10項目に11. 教員養成を補足して、インタビューのトランスクリプトを意味のまとまった単位の文章にわけ、すべての文章をこの11項目に分類した。1. 授業。2. 生徒指導。3. 部活動。4. 保護者の問題。5. 家庭の教育力。6. 学校内の施設不案内。7. 学校運営の仕事。8. 同僚関係。9. 初任研。10. 研究授業。木原成一郎(2004)によれば、この10項目は、H大学教員養成学部を卒業し2002年度と2003年度及び2004年度に採用された新任教師11名を対象とし、1学期の週末ごとに学校と体育授業に関する心配を自由に記述させた85個の心配項目を、3名(大学教官1名、小学校現職教員1名、大学院生1名)でKJ法を用いて分類して得られた項目である。

III 背景

高野和子(1998)によれば、現在のイングランドの教員資格(QTS, Qualified Teacher

Status)は、高等教育機関に設置された 3 年もしくは 4 年制の教育学士課程(BED, the Bachelor of Education course)か、教育以外の学士号を取得した後に入学する 1 年制の学卒後課程(PGCE, Postgraduate Certificate of Education course)を卒業することによって取得される場合が大多数である。そして中等教育の教師は PGCE で、初等教育の教師は教育学士課程で、その多数が養成される。また、教員養成課程認定の基準を示した 1993 年の教育科学省のサーキュラー (DES,1993)によれば、初等学校の教員を目指す教員養成課程の学生が学校で過ごす時間は、少なくとも 4 年制の教育学士課程で従来の 20 週間が 32 週間へ、3 年制の課程で 15 週間から 24 週間へ、学卒後課程及び 2 年制課程で 15 週間から 18 週間へと延長されることになった。教育学士課程や学卒後課程に対し、より実践的な力量の養成と、学生が学校で過ごす期間の延長が求められてきたのである。木原成一郎(2000)によれば、この方向は、教師の養成における学校の役割の増大によって、「学校を基礎にした教員養成」(a school-based initial teacher training)と呼ばれている。

イングランドでは、初任教師は採用後の 1 年間を初任者研修期間として特別にプログラムされた研修を受ける。1999 年の教育雇用省の規定によれば、その内容は「観察と援助」つまり、初任者研修担当教員による初任教師の授業の観察とアドバイス、そして研修計画の見直し、さらに新任教師によるベテラン教員の授業の観察である。また、初任教師に対する様々な評価が行われる。

TTA(2003)によれば、2003 年に改訂された導入教育の目玉は、the career entry and development profile といわれるファイルの内容の改訂である。これは、まず学生が教員養成の卒業時に教員養成課程の指導教官と対話して自分の到達点を確認してファイルに記入する。次に採用時に導入教育の指導教員と対話し 1 年間で最も優先すべき成長課題を設定する。さらに授業が始まると 1 学期の半ばと学期末、2 学期の半ばと学期末、3 学期の半ばと年度末と合計 6 回このファイルを用いて指導教員と対話し、それまでの学習の成果を振り返ると共に次の段階にどう前進するかを明確にするというものである。校長は学期末と年度末の 3 回この対話に参加し、教育委員会に初任教師の成長について報告書を書き年度末には導入教育の目標を達成したかどうかを評価し報告するとされている。

例えば、採用時には、指導教員と対話しこのファイルに記入する例が次のように示されている。

「1. 導入教育の間に最も優先すべき成長課題は何か。2. 教員養成終了の時期からその優先すべき課題は変更したか。例えば新しい必要性や領域が課題となってきたかどうか。3. 導入教育の間に短期的、中期的、長期的な時間にあわせて、それぞれどのような成長課題を優先するのか。4. これらの優先事項を前に進めるためにどのような準備や援助や成長の機会が必要なのか。」(TTA, 2003, p.18)

TTA(2003)によれば、初任者は採用時に各自の成長課題を明確にし、学期に 2 回ずつ指導教員と対話し、各学期に校長と対話する機会を持つ。そして 1 年後に到達を期待される基準が明示されている。その基準は、下記の「教員資格基準」の各項目を「継続して教員資格基準に適合し、採用された文脈の中で専門的能力を向上させる。」こととされている。この基準に到達しない場合は、再度導入教育の期間が延長されるか、不合格になる。この評価の結果に対しては不服の申し立てができるとされている。

表 1 にあるように、「教員資格基準」は、「1. 専門的な価値と実践」と「2. 知識と理

解」と「3. 授業」から構成されている。「1. 専門的な価値と実践」は、教職への情熱を持ち子どもの成長を信頼する教師の信念に関する項目である。また、「2. 知識と理解」は、学生が担当する学校階梯、学年段階のナショナル・カリキュラムが求める教科の知識と横断的カリキュラムに関する知識を中心とする。「3. 授業」は、指導計画作成と指導改善のための評価、そして学級担任としての学級経営をすすめるために必要な技術などである。

表1 「イングランドの教員資格基準」 出典：TTA(2001)

<p>1. 専門的な価値と実践 新任教師は、次にあげられている GTCE による職業的な倫理を支持し理解しなければならない</p> <p>1-1 全ての生徒に高い期待を持っている。彼らの社会、文化、言語、宗教、そして人種的背景を尊重する。そして、生徒の教育上の成績を上げることが委ねられている。</p> <p>1-2 生徒を思いやりや尊敬の念を持って分け隔てなく接する。また、学習者としての生徒の発達に関心を持つ。</p> <p>1-3 生徒から期待されるような肯定的な見方や態度、行動することを示し進める。 (以下略)</p>
<p>2. 知識と理解 新任教師は次にあげられるような全ての実践を行わなければならない。</p> <p>2-1 教えるために養成された確固たる知識と教科の理解をもっていなければならない。資格を得るためには、中等教育の知識と理解は学士レベルと同等のレベルであるべきである。特別な局面の関係においては次のことが含まれる。</p> <p>a 初期の段階ではねらいや原理を知り理解する。6つの場面で学びと、初期の学習の到達は、初期段階のための QCA/DFEE Curriculum Guidance で記述される。そしてそれには、入学前の子どものための枠組み、方法、評価規準が国の基礎的計算能力と読み書き方略によって説明されている。</p> <p>b Key Stage 1 (6歳から7歳：引用者注) / K.S. 2 (8歳から11歳：引用者注) では、National Curriculum の中心教科の教科課程を知り、理解する。そして、枠組み、方法や評価規準が国の読み書きや基礎的計算能力の方略によって説明されている。そして、次にあげる教科の学習の範囲を横断することを十分に理解している。 ・歴史と地理 ・体育 ・ICT ・美術とデザイン、もしくはデザインと技術 ・舞台芸術 ・宗教教育 必要とされる場面においては、経験ある同僚からのアドバイスを受けて、養成されてきた学年に応じて教えることができる。</p> <p>c Key Stage 3 (12歳から14歳：引用者注) では、学習の National Curriculum Programs を適切に理解し知る。そして、主要教科の1つもしくはいくつかを教える資格を得る。この教科とは、Key Stage 3 の national Strategy としての関連的な枠組みや方法、評価規準を説明することができる。これらすべての指導資格は Key Stage 3 の教科について National Curriculum の横断的な教科の扱いに期待していることを知り理解する。そして、Key Stage 3 の national Strategy について説明されている指導に精通している (以下略)</p>
<p>3 授業</p> <p>3-1 計画、願い(評価規準)と目標 新任教師は次にあげるようなすべての実践を行わなければならない。</p> <p>3-1-1 教室にいる全ての生徒に関係づけられた教授と学習の目的に挑み続けなければならない。それは、次のようなことへの理解に基づいて行われる。 ・生徒 ・過去及び現在の達成状況の把握 ・生徒の発達段階に応じた評価規準 ・生徒の発達段階に応じた学習内容とその範囲 (以下略)</p> <p>3-2 形成的評価と総括的評価 新任教師は次にあげるようなすべての実践を行わなければならない。</p> <p>3-2-1 形成的に評価する範囲を適切に設けなければならない。計画された学びの目的に対する生徒の進歩を評価するための評価方略をもたなければならない。そして、計画や教え方の改善のための情報にしなければならない。(指導法改善のための評価) (以下略)</p> <p>3-3 授業と学級経営 新任教師は次にあげるようなすべての実践を行わなければならない。</p> <p>3-3-1 生徒に対し高い期待を持ち、教授と学びに集中するよりよい関係を築く。多様性が尊重され、生徒が安心して自信の持てる意図的な学習環境を設立する。 (以下略)</p>

IV 事例

1. A君

(1) 採用された学校の状況

A君の採用された学校は、Nの町はずれにある白人の労働者階級が多く住んでいる住宅街の中にある中等学校であった。この学校は7年生から11年生まで、つまりイングリ

ドのナショナル・カリキュラムでいえば、キー・ステージ3と4の中等義務教育5年間をカバーし、さまざまな学力レベルの生徒が同じ学校で学ぶコンプリヘンシブ・スクールだった^{注1)}。この学校では、男子と女子は基本的に別々に教えられ、体育の教員は男女それぞれ2名ずつであった。

表2 事例教員の学校及び勤務の状況

氏名	赴任校の特徴	教員養成の特徴	赴任校の負担と導入教育の体制	体育授業の実態	部活動の指導実態	その他
A君	<ul style="list-style-type: none"> ・F・コンプリヘンシブ・スクール、ノッティンガム ・ノッティンガムの町はずれで白人の労働者階級が多く住んでいる住宅街にある ・7年生(11歳)から11年生(16歳)まで、3と4の中等義務教育5年間 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノッティンガム出身、 ・PGCE at LM大学 ・教育実習校: Leeds 町中の1学年6学級、全校生徒200人の大規模校とH Grammer Schoolの2校 	<ul style="list-style-type: none"> ・7年生の学級担任 ・週20時間の授業(担任学級のPSE1時間を含む) ・導入教育指導教官Iさん(他教科)が授業観察と懇談 ・体育主任(学科主任)J氏が授業観察(5時間の授業免除が実現せず) ・年間8-10回の外部研修 (SEN, Behaviour, PE discussion) 	<ul style="list-style-type: none"> ・週19時間 ・体育実技: 体育主任と同時間に異境材を指導する。 ・7年生4時間、8年生4時間、9年生4時間、10年生2時間、11年生2時間) ・GCSE(10年生実技1時間、11年生実技1時間、理論1時間) 	<ul style="list-style-type: none"> ・放課後部活動指導(ボランティアで地域の支援なし): 月曜、バスケットボール ・火曜、卓球、サッカー ・水曜、バドミントン、サッカー ・木曜、バスケットボール ・金曜、陸上 ・昼休みは不明 	<ul style="list-style-type: none"> ・現在体育館を建設中、これができれば課外活動も体育授業も充実できる ・導入教育の成長課題はGymnastics, IT, GCSEの教え方の向上
Bさん	<ul style="list-style-type: none"> ・I・コミュニティー・カレッジ ・郊外にあり地域の生涯学習機関の役割も持つ学校なので校内に屋内水泳プールあり ・6年生(11歳)～9年生(14歳)のミドル・スクール、キー・ステージ3中心 ・学校全体で28クラス、生徒800人、ミドル・スクールとしては規模大 	<ul style="list-style-type: none"> ・R大学PGCE出身 ・新任校で教育実習を行った ・陸上競技のプレーヤーだったが、不得意な種目の指導法は、大学のコーチング・コースで学んだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・同僚教師: 年配の女性教師、Kさんと男性L氏(体育主任) + ? ・導入教育指導教官: 1学期は教頭、2学期は別の教師 ・体育のinformal supportは、L氏(体育主任)から受ける ・他教科含めて初任教師4名 		<ul style="list-style-type: none"> ・担当種目: 7年生の女子ネットボール(10人)、7年生(15人)と9年生(10人)の女子サッカー、7年生の男女バスケットボール ・学校には男子サッカー、男子ラグビー、バドミントン、水泳がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校外の地域スポーツクラブの水泳、バドミントン、柔道、空手などに多数の子どもが参加。
Cさん	<ul style="list-style-type: none"> ・HK・コンプリヘンシブ・スクール ・郊外にあり多くの生徒が遠くからバスで通学 ・校舎と体育施設を新築したので、体育設備は充実している(校内に屋内プールとダンス・スタジオ、フィットネス・ジムあり) ・7年生(12歳)から13年生(18歳)までの1200人の生徒 ・中等の義務教育と大学入学準備のための生徒を含む大規模校 	<ul style="list-style-type: none"> ・R大学PGCE出身 ・サッカープレイヤーで現在週末はプレイ 	<ul style="list-style-type: none"> ・Cさんは58歳の専任女性教師が退職したため、初任者にもかわらず唯一人の専任女性教師として女子の体育授業と部活動の経営も担わざるを得ない状況 ・体育教師: 男性主任(兼教頭)、男性新任1名、女性非常勤2名、女性新任1名、校長が2時間授業担当 ・導入教育の指導教官1名(1週か2週に1回面接)、体育主任がinformal support ・2学期からラフバラ大学より教育実習生2名受入 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育授業を週20時間 ・10年生のGCSE担当(毎週1時間実技、1時間理論) ・12年生のGCE-ASレベル担当 ・キー・ステージ4の10年生(実技は週1時間)にダンスの授業を導入した、次年度に低学年に男女混合のダンスクラスを導入予定 	<ul style="list-style-type: none"> ・校区が広い放課後の部活動は困難。そのため毎日昼休みに部活動指導。昼食は空いた時間に歩いてバナナ等を食べるだけ。 ・指導は体育教師のみ担当 ・女子ネットボールと女子サッカーを指導 ・年間6回のみ土曜日に対抗試合へ引率 	<ul style="list-style-type: none"> ・導入教育の成長課題はGCSE試験の知識

2時間目はA君が体操、体育主任がショートテニスを担当し、生徒は25名ずつ体育館の二つのホールに分かれて集まった。A君は、授業後のインタビューで「今は生徒のしつけに注意するようにしている。ここの生徒たちはそれほど所得が高くない階層なので人な

つっこいのはいいけれど規律を守れない傾向があるので注意している。」というように、体操の場作りも一人ひとりに子どもの氏名を呼んで、行動を指示しながら規律正しく行っていた。また本時の課題である、各自が自分で一連の動きを工夫して創作するという課題を説明するときも、生徒に静かに座らせて少々長すぎるほど説明を繰り返していた。まずは生徒に予定していた課題を理解させ、予定通り授業を進めようとする初任の教師らしい授業の様子であった。

(2) 学校に関する心配事項(授業、部活動、初任研、教員養成の項目を中心に)

授業後のインタビューで、「学校生活で心配なことはあるか?」とたずねたところ、「体育に関して言えば、私はそんなに心配事はなかった。というのも、間違った情報を教えたとしても大した影響はないが、理論面のGCSEは、正確な情報をクラスで教える必要がある。」と述べた。導入教育(初任者研修)の採用直後の指導教官との面談で、「Gymnastics、GCSE、Information Technologyの教え方を上達させる必要性」を優先課題としてこたえているように、彼は実技の体操と選択体育であるGCSEの実技と理論の授業で教え方の改善を成長課題と考えていた^{註2)}。その具体的な方法を彼は次のように述べている。

「まず子どもたちに躰/規律(discipline)を教えることが先決。もしそれができてもっと慣れてきたら、私の授業自体をもっと面白いものにしたいと思っている。例えば、ビデオカメラを使ったり、自分で既に作ってある Task Card を使って、子どもたちが自分自身で考える機会を与えたりしたい。」

学習規律を確立することを優先し、その後に教具や教材を用いて子どもの自発的学習を援助するという順序は授業づくりの原則にかなっている。同時に彼は、「私たちがやろうとしていることは、なるべく多くの ICT を取り入れることだ。」と述べ、パワーポイントで生徒に学習発表をさせたり、コンピューターで調べ学習させていることを発展させたいと意欲を燃やしている。この体育授業でのコンピューター活用について、当初彼は、「コンピューターで情報を収集させる授業など、という明確な考え方があるので、始めは、体育課(department)がそれを認めてくれるかが心配」していたが、「体育主任は、ソフトウェアを買うことにサポートし、また授業を ICT をベースにしてやることを勧めてくれる。」と述べ、体育主任の援助に満足している。

体育実技の授業に心配があまりない理由は、イングランドの教員養成における教育実習の充実にある。A君は、1年間で18週間、2つの異なった学校で行った教育実習の経験を次のように述べ、体育授業の指導力量形成においてその貢献を指摘する。

「LM 大学はよかった。それは形式の全く違う 2つの学校へ行くことが出来たから。始めの学校は、Leeds の街中であって、6Forms、2000人の生徒がいる大きな学校。2番目は Grammar School。色々なスポーツを試すことができた。そこでは、上流階級の Rugby Union をやっていて、1番目の学校は Rugby League だった。そういう点ではよかった。LM では、もし 12時間授業をしたら、12個の Scheme of Work(授業案)を書かなくてはいけなかったもので、多くの宿題があったけれど、今はそれが役に立っていると思っている。」

さらに、A君は大学の授業の役割にも言及するが、やはり教育実習の貢献を強調する。

「(学校で実際に経験したことの方が役に立ったと思うかの質問に対して) 実際面ではそうだ。しかし、大学の授業も良かった。それは、お互いが集まる機会があり、話をする事が出来るし、自分が足りなかったと思うところが、他の人もそういう経験をしていたり、

ということが良かった。しかし、授業も良いが、やはりどのように授業をするかを最も勉強できるのは現場にいて、その他の教師がどのように日々教えているかを目で見ることだ。」

導入教育に関しては、校外研修と校内研修について次のように述べている。

校外研修は近隣の N 大学で、体育教師が集まり体育科の見学者への対処の仕方を討議したり、生徒の規律や特別に教育を必要とする人たち (SEN) への援助などについて研修する。総括的に「いいよ。このプログラム責任者がしっかりしている。…1年間で 8-10 回水曜夜それがあるのだが、それもしっかりとお金が支払われている。」と肯定的に評価している。

校内研修は、Career Entry Profile に基づいて進められている。その様子を彼は次のように述べる。

「(Profile が机の上にあってそれを取り出しつつ) Transition Points をつけていて、研修期間からの問題をつけてあるので、NQT として始めた時に何を伸ばしたら良いかが分かっていた。今でもまだ私の場合は、Gymnastics、GCSE、Information Technology の教え方を上達させる必要性を感じていて、それが私の今の NQT でのターゲットである。この Program が進むにつれて、フォームに記載するようにしている。そうして、NQT Induction プログラムの責任者がフィードバックをする。また Observation Sheet でも、いくつかのフィードバックが得られている。彼女は系統だって能率よくやるので、とてもいい。ここには、私の長所、どの部分を成長させるかということ、自分自身でどのように授業が進んだか、といったことを記入する。また、NQT コースへ 1 日間行ったときもしっかりと記入し、体育主任とプログラム責任者からもサインをもらう。」

また フォーマルな援助に加えて「私の場合は体育主任である M が 2、3 回と NQT コーディネータが 2、3 回観察をする。このようにして、常に観察されている。」と述べ体育科のインフォーマルな援助を受けていることを肯定的に受け止めている。

2. B さん

(1) 採用された学校の状況

I 校は、地域の生涯学習機関としての役割を兼ね備えた、ナショナル・カリキュラムでいえばキー・ステージ 3 の生徒を対象にした公立中等学校であった。地域の生涯学習を兼ねている学校なので屋内プールを持ち、その運営経費は地域の行政が補助しているとのことであった。

着衣泳の授業は約 10 名ずつのグループに分けられ、水泳の授業は男女共修であった。男女は種目により共修と別習の場合があるという。例えば球技はサッカーが男子で女子はネットボールというように分けられ、健康関連体力 (Health related fitness) は男女共修だということであった。

水泳のグループはみたところ泳力の相違によって分けられ、B さんは泳力の低い生徒に着衣のまま浮くことを教えていた。反対側のプールサイドでは、年配の女性教師がもう一つのグループを指導し、着衣のまま平泳ぎで泳がせていた。B さんはグループ全体に絶えず声をかけながら、一人一人の子どもたちに時々細かい指示をしていた。また見学者が男子 4 名女子 2 名ほどいたが、彼らには泳いでいる生徒を観察しながら気づきを記入する学習カードが配られ、学習の課題が指示されていた。

(2) 学校に関する心配事項(授業、部活動、初任研、教員養成の項目を中心に)

体育の授業に関して心配なことは何かを聞いたところ、「私が得意ではない分野に対しては多少心配があった。」と B さんはこたえた。そしてすぐに「しかし、もし何か心配があれば、もう一人の女性体育教師の L と体育主任へ聞きに行くようにしている。私たちは毎週金曜日にミーティングがあるので、1 限中に私の心配事や、私たちが持っている心配事を話す機会がある。」と話し、授業はそれほど重荷になっている様子ではなかった。

そこでさらに、「体育教師は生徒指導(caring)をしないといけないでしょう。例えば参観者として授業をさぼることにに関して。」と意地悪な質問を試みたが、「どうしても体育に参加しない場合は、中耳炎などの診断書を医者からもらって、持ってくるようになっている。」加えて、「女子生徒が、生理が始まるとさぼりが出てくるのでは？」という質問を重ねたが、「女子生徒が生理(period)で休む場合、教師がしっかりとモニターし、P と記録しているため、毎週その理由で休むことはできないようになっている。もしそのようなことが続けば、両親に電話をすることをしている。」と自信を持って答えていた。このやりとりで教師として出欠という経営的な部分には毅然として指導していく態度ができていると思われた。

学校によく適用している雰囲気を感じられたので、「ここではリラックスしているようだけれど。」と質問をしたところ、「ここで教育実習をしたし、2 つの学校で教育実習するから、それが助けになった。」と彼女は答えた。教育実習にいった学校に就職できたことで、同僚関係を含め学校の環境に早くなれることができたのであろう。また、地域や学年という点で 2 つの異なった学校で教育実習を経験するイングランドの教員養成が効果的に働いているように思われる。

また、「陸上の選手だったそうだけれど、自分の得意でない分野の種目は難しかったか？」という質問に、「そんなことはない。コーチング・コースに参加する機会があるため、それによって、自信をつけることができる。そのコースは、PGCE の間に自発的に自分の不得意分野を補うものです。」と彼女は答えた。R 大学の教員養成コースは OFSTED の外部評価で高い結果を得ているが、大学で教員養成コースの授業のほかに、コーチング・コースの実技授業を受けることができるシステムが実技指導力をつけるために貢献していることが理解できた。

導入教育(初任者研修)について、「どのような役割を Induction Tutor は担っているのか？」と聞いたところ、導入教育担当の指導教官の行う体育の授業以外の援助について、彼女は次のように答えてくれた。

「心配事について話し合いを出来るようなミーティングを開く、といったサポート。この学校で長い間働いている人なら知っている、例えば特別な教育的サポートを必要としている生徒に関する事、といった学校規約(codes of practice)についての話し合い。Career Profile をしっかりと追う。1 学期に 1 回、私たち NQT がどのように進歩しているかをモニターして観察することでフィードバックがある。」

体育の授業について援助する指導教官が必要ではないかと思われ、「もし良いフィードバックが欲しければ、Physical Educator の専門家が必要なのではないか？」と質問をしたところ、「いいえ。もし PE に関するフィードバックが欲しければ、体育主任が私を観察し、彼からもらうことができる。教師としての質、経営面からは、Induction Tutor が行っている。」

と彼女は答えた。体育授業の援助は体育主任が行い、その他の援助は導入教育の指導教官が行うシステムが機能しているようである。

ところがこの後、Bさんは導入教育で1学期に受けた教頭からの援助と評価に関して、「彼はSIP（導入教育プログラム）が初めてだったので、何をしたらいいか混乱している面があった。」と自分から話を始めた。さらに、同席した元大学の指導教官が「この導入教育のドキュメントは、そのプロセスに対しては全く影響を与えていない。それは以前にも起こっていたことだ。インフォーマルサポートがもっとも大切なものだよな？」と語ったことを受けて、「N（同席した大学の元指導教官）が言ったように、近くに話を出来る人がいるような、インフォーマルの方が詳細を話すことができるし、ベスト。」とBさんは述べた。Bさんは制度的な初任者研修制度による援助より教科の同僚の日常的な援助や指導が重要だといったのである。

3. Cさん

(1) 採用された学校の状況

R大学のPGCEコースを卒業したCさんは、前年に教育実習校として配属されたHK校に初任教师として採用された。HK校は、校舎や体育施設を新築したばかりで体育設備に大変恵まれている。同校は、地域の生涯学習機関でもあるので体育施設の整備や維持の費用について地域の援助を受け、3コースある室内25mプールや高価なトレーニング機器を備えたフィットネス・ジムやダンス専用の小ホールを備えていた。この学校は、11歳から18歳までの中等の義務教育と大学入学準備のための生徒を含む大規模校である。

Cさんは、採用時にはいた58歳の専任女性教師が1学期修了後急に退職したため、自分の担当する授業と部活動の指導に加え、初任者にもかかわらず唯一人の専任女性教師として女子の体育授業と女子の部活動全体の管理運営を担わざるを得なくなっていた。

(2) 学校に関する心配事項（授業、部活動、初任研、教員養成の項目を中心に）

「初任教員（NQT）として何か心配事がありますか」の問いに、「心配事というのは、往々にしてどこの学校にいるかによって決まるものだ。ここの学校では、生徒の行儀がいいので、私は全く問題がないからラッキーだ。」とCさんは答えた。Cさんは「PGCEからNQTへと移っていくことで何が違うかということ、プレッシャーだ。」と述べ、PGCEの教育実習の方が「プレッシャー」があったと言った。PGCEのプレッシャーとは、「授業計画を立てて、ある決まった方法を取らなくてはならない」ことであり、「とても詳細でなくてはならない」授業計画作成のことであった。また、PGCEでは「子どもたちのことを知り始めたときには、もう動かなくてはいけない」という。つまりPGCEの教育実習の授業と比べると、今では「私が計画を立てている子どもたちのことを、私はもっとよく知っている」し、授業計画についても「計画を立てるスタイルは違っているし、そのプレッシャーはなくなった。」というのである。

ただし、Cさんは秋学期から女性の専任教師がCさん一人になってしまったことを、「私にとって一番大変だったこと」といい、「11歳から18歳のKey Stage3、Key Stage4、GCSE、A-Levelの全てで体育をやる学校で、女性の体育教師が1人しかいない学校があるとしたら、驚くべきことだよ。」と述べ、今の状況は「アンフェア」だと指摘した。専任女性体育教師が一人なので、「通常であれば、仕事の量を分担することで、もっと仕事を受け入れて、子どもたちに提供することができるのに。子どもが私のところに来て何かをしたい、と言

ってくるのだけれど、断らなくてはならないことは、とても残念なことだ。」と C さんは語った。また、C さんが授業に出てしまい、女子更衣室で 20 分以上かけて着替えている女子に男子体育教員が「早く」と声をかけることもできず困ったことがあったという。

しかしながらこの困難な条件のもとで、女性の体育授業の多くを担当している C さんは、「Y10 まで来ると 1 週間に 1 時間しかないけれど、ホッケーやネットボールを長年やってきたために、何か違うことをやりたいと思っている」女子生徒の要望を取り上げ、「新しいことを取り入れたらどうか、ダンスを取り入れたらどうか」という提案を体育主任に行った。体育主任もその意見を取り上げたという。

さらに、C さんは「毎日お昼の時間には、私はクラブしているんです。それは私自身で選択してやっているからね。」ということで、昼食はいつも歩きながらバナナやサンドイッチをかじるだけという。この学校は広範囲から生徒が登校するために、放課後は部活動を行うことが困難で 1 週間に 1 回しか活動しできないため、昼食休憩時の部活動を重視し C さんは毎日昼食時間は生徒を指導しているのである。体育主任によれば、「以前の旧校舎では、沢山のクラブを持つための施設はなかったけれど、男性初任教師と C さんが若い教師として入ってきたことで、25 年間教師をしていた人よりもエネルギーがあるし、クラブをしたいという気持ちが強い。だから、課外活動のプログラムは徐々に拡大してきた。」という。ただし、「課外活動に関して心配事がありますか？」という問いに対して、C さんは、「いいや。私は自分自身で選択してやっていて、そこに来る子どもたちは好きだし、やる気のある子たちで、積極的だし、規律正しい。PE で良く出来る子どもたちが課外活動に来るから、私は楽しんでやっている。」と述べた。

女性の専任が一人という困難な状況で、C さんは授業に対しても部活動に対しても積極的に取り組んでいる。だからこそ、C さんは保護者の中にある次のような体育に対する消極的な態度を心配であるという。「体育授業に関して親と関連する最も大きなことは、親が子どもには全く問題がないのに、病気を理由に体育を休ませる、ということだ。それが私の唯一の心配事だね。でも、それに対して何ができるか…。」

導入教育の体制は、制度的な導入教育のメンター Q が、C の成長課題の設定と到達の評価を行い、学校生活全般に関する援助を行う。同時に体育主任の R が、日常的な体育の授業や生徒の指導に関する援助を行うことになっている。Q は、C によれば、「学校全体の中での一般的な福利厚生に関して責任がある。つまり、上手くいっていないことはないか、自信を取り戻すために話をする必要がないか、といった、彼女は私にとって「全般的な」人」であるという。さらに Q は、「次にどこへ進んでいったらいいか、ということを書いてくれる人で、彼女が私の目標を立ててくれる」メンターとしての役割を果たしているという。例えば Q は、C さんと協議し GCSE の試験について知識を伸ばすという成長課題を C さんに提示したという。

これに対し、体育科主任の R は特に C の成長課題に関する議論は行わず、教科の同僚として困ったことの相談にのってくれるという。C さんは、「R は、私のクラスを観に来て、アドバイスをくれるし、上手くいっているか、と頻りに聞いてくれる。」「学科主任して R はとても近づきやすいし、私が何かに躓いていたり、どうしたらいいか分からない時は、助けを求めることはとてもしやすいので、何も問題はない。」と述べ、制度としておかれているメンターの Q 以外に、年配の同僚として授業を観察して日常的にアドバイスをしてく

れる R の援助を重要であると述べた。

V まとめ

事例の検討により、導入教育の制度のもとで、職能成長と心理的な援助に関して初任者の必要なことは以下の諸点であることが示唆された。

1. 授業について

授業の実技に関して、A 君が体操を不得意分野とし導入教育の成長課題としていたが、B さんと C さんは特に課題として設定していなかった。B さんが不得意分野の実技を PGCE コースの授業で克服したようにナショナル・カリキュラムで示された実技指導に必要な知識と技能は教員養成段階でおおむね習得されている。これに対して、A 君と C さんがともに GCSE や GCE の理論の授業に必要な知識や指導法を成長課題に設定しているように、これらの授業に必要な知識や技能は教員養成段階では十分達成されていないように思われる。中等学校では GCSE や GCE の理論に関する選択授業が生徒の進路保障のために重要な役割を果たしている。初任者研修段階の職能成長の内容として GCSE や GCE の理論の授業の知識や技能の向上を設定しそれらの達成を援助することが必要である。

チューバックら(Chubbuck et al., 2001)は、初任教師の援助と職能発達のための必要を把握するために、3年間に 77 名の新任教師を対象に、大学と地方教育行政機関の連携で初任者への援助のプロジェクトを実施し、初任者のこのプロジェクトへの必要を把握した。チューバックら(Chubbuck et al., 2001,p.374)は、同僚とは異なる実践を探求するために自分の実践を脅威を感じることなく分析できる余地を十分に与えることと、同僚とは異なる実践に挑戦することの双方を意味する「初任者のための安全(safety for the novice teacher)」が初任者に必要な援助と結論づけた。

このチューバックら(Chubbuck et al., 2001,p.374)が指摘した「初任者のための安全(safety for the novice teacher)」をふまえれば、A 君の事例は下記のように解釈することができる。つまり、A 君は GCSE でのコンピューターの活用を体育科で認めてもらえるかどうか心配していたが、体育主任がそれを認めると同時に教材の購入に財政的な援助をしてくれたため、同僚とは異なる実践への挑戦に意欲を燃やして取り組むことができた。A 君の事例をふまえれば、初任者の同僚たちが、初任者が持つ心理的な心配を受け止めるとともに、初任者が新しい課題に挑戦できるように励ますという援助の仕方が求められるのである。

2. 部活動

C さんは昼食を取る時間を犠牲にして、ボランティアな部活動の指導に毎日意欲的に参加している。体育主任は、初任教師が部活動指導を意欲的に担当し部活動のプログラムが拡大したことを初任教師のエネルギーとして高く評価した。表 2 によれば、A 君は毎日放課後にボランティアで部活動指導を担当している。また B さんは 3 種目の部活動指導を担当している。初任者は負担の重いボランティアであっても、運動に意欲的に参加をする生徒を指導することに意欲的に参加し楽しんでいる。さらに、体育主任はその初任者の部活動への意欲的な参加を体育科の経営的な観点からも高く評価している。たしかに、初任者の部活動指導は、生徒を多面的に理解したいという彼らの要求に応える意義を持つが、時間的肉体的に初任者の加重負担にならないように注意することが必要である。

3. 導入教育

A 君、B さん、C さんともに導入教育の指導体制は、指導教員が導入教育全般の目標設定と評価を担当し、体育主任が日常的な授業に関する援助を担当していた。導入教育を受けている初任者は 10%の授業時間軽減が制度的に保障されている。トッテルダムら (Michael Totterdell et al., 2001)によれば、初任者にとって最も効果があると回答された導入教育の内容はこの授業時間軽減であった。一方、体育主任は授業に関する心配事に関して日常的に初任者の相談にのり、初任者の体育の授業を観察して援助に携わっていた。B さんの証言にあるように、授業に関しては体育主任からの援助は制度化されている指導教員の援助よりも効果がある場合が多い。また A 君と C さんも体育主任の日常的な援助が授業の心配ごとの処理に効果的であると指摘していた。ところが、体育主任が導入教育の指導教員でない場合、体育主任が初任者の援助に携わっていても授業時間の軽減は保障されず負担は重い。体育主任が初任者の授業を観察しフィードバックができるように初任者が配置された場合の体育主任の授業時間軽減の制度化が望まれる。

謝辞：イングランドでこの研究を支えていただいたラフバラ大学のロレイン・ケール博士並びに立命館大学の山下高行教授（当時ラフバラ大学留学中）と取材や翻訳に優秀な英語力を総動員し献身的にサポートしていただいたラフバラ大学博士課程在学中の日本人大学院生、山本ヤーヤさんに感謝の言葉を送ります。また、授業の合間の多忙な時間を見つけてインタビューに快く応じていただいた中等学校の先生方に感謝します。ありがとうございました。

注

注 1) イギリスのナショナル・カリキュラムの現状と体育科の特徴については次の文献を参照されたい。木原成一郎（2002）「イギリスにみる学校体育カリキュラム改革の動向」『スポーツ教育学研究』第 22 巻,第 1 号, pp.49-54.

注 2) GCSE(General Certificate of Secondary Education)は、イギリスの中等学校の修了資格試験である。ナショナル・カリキュラムのキー・ステージ 4 の段階で選択教科として教えられる。体育とダンスをその選択科目の一つに置く学校が増えている。GCSE の体育科授業の詳細は次の文献を参照していただきたい。木原成一郎（1998）「イングランド・ウェールズの中高等学校における体育理論の授業」『体育科教育』第 46 巻, 第 4 号,pp.70-72.

文献

Behets D. (1990), Concerns of Pre-service Physical Education Teachers, *Journal of Teaching in Physical Education*, 10, pp.66-75.

Chubbuck, S. M., Clift, R. T., Allard J., and Quinlan J. (2001) “Playing It Safe as A Novice Teacher: Implications for Programs for New Teachers”, *Journal of Teacher Education*, Vol.52, No.5, November/December.

DFE (1992), Initial Teacher Training (Secondary Phase) (Circular 9/92). (中高等学校教員

養成課程対象)

DES (1993), Circular 14/93. (初等学校教員養成課程対象)

Gold, Y. (1996) Beginning teacher support: Attrition, mentoring, and induction. In Sikula J. (Ed.) Handbook of research on teacher education (2nd ed., pp.548-594) New York Macmillan.

Hardy C. (1996) 'Trainees' Concerns, Experiences and Needs', in Mawer M. ed., (1996), Mentoring in Physical Education, the Falmer Press, pp.59-72.

川喜田二郎 (1967) 『発想法』中央公論,pp65-114.

木原成一郎(2004)「体育教師の実践的力量に関する研究①－初任者研修段階で求められる実践的力量に関する事例研究－」『日本体育学会第55回大会抄録集』 p.597.

木原成一郎 (2002)「イギリスにみる学校体育カリキュラム改革の動向」『スポーツ教育学研究』第22巻,第1号, pp.49-54。

木原成一郎(2000)イギリスの「学校を基礎にした教員養成」(a school-based initial teacher training)におけるメンターとしての学校教員の役割『広島大学学校教育学部紀要 第I部』第22巻, pp.59-70

木原成一郎 (1998)「イングランド・ウェールズの中高等学校における体育理論の授業」『体育科教育』第46巻,第4号,pp.70-72。

Michael Totterdell, Ruth Heilbronn, Sara Bubb, Cath Jones, EVALUATION OF THE EFFECTIVENESS OF THE STATUTORY ARRANGEMENTS FOR THE INDUCTION OF NEWLY QUALIFIED TEACHERS, Final Report, Institute of Education University of London, December 2001.

高野和子 (1998)「イギリスの教員養成の動向」浦野東洋一、羽田貴史編『変動期の教員養成』同時代社。

Teacher Training Agency (2003) Career entry and development profile, pp.4-5.

Teacher Training Agency(2001) Qualifying to teach, Professional standards for Qualified Teacher Status and Requirements for Initial Teacher Training.

トーマス・ネルソン、片岡暁夫他訳 (1999)『最新体育・スポーツ科学研究法』大修館書店,p.388.

米川秀樹、富田福代 (2003)「イギリスの教員制度－養成・研修・人事」『諸外国の教員制度』日本教育大学協会,pp.35-74。